

研究論文Ⅱ「博物館における常設展示観覧動線の現状と課題について（都道府県立歴史系博物館を対象に）」

要旨

本研究では、選択できる展示動線という主体的な学びを促すと考えられている展示手法に焦点を当て、その現状と課題について考察した。研究論文Ⅰでは、都道府県立歴史系博物館の常設展示における展示目的・展示内容・展示手法の変化傾向をまとめ、選択できる展示動線や多層的な展示内容、博物館と利用者が交流できる空間の設置など、新たに現れた主体的な学びを促すための展示手法を確認した。その上で、都道府県立歴史系博物館における利用者に対する意識の変化を考察した。しかし、博物館側の考え方が実際どのように具現化されたか、また、主体的な学びを促すための展示方法が利用者にとどのように受け止められているかについては、さらに調査する必要があると考えられる。

そのため、本稿では、研究論文Ⅰで調査した11館の博物館のうち、新展示の利用状況に関する来館者調査を行った北海道博物館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、群馬県立歴史博物館、沖縄県立博物館の4館を対象に、選択できる展示動線の利用状況について、これらの来館者調査の結果に関する分析を通じて明らかにした。その結果、観覧順路がわかりにくいという問題が普遍的に存在していることがわかった。特に、旧来の強制動線から自由動線に変更した博物館でこの問題が顕著に見られたと言える。また、その対策としては、観覧順路を事前に利用者に説明することやモデルプランを提供することが考えられている。

次に、上述の対策の有効性を検証するため、選択できる展示動線を採用している山梨県立博物館と大阪歴史博物館を対象に、学芸員への聞き取り調査を実施した。これらの2館を調査の対象に選んだ理由は、山梨県立博物館が展示動線の設計意図と使用方法を展示パネルで明確に提示しており、大阪歴史博物館がハイライトプランと全周プランという2つの観覧プランを提供しているためである。調査の結果、選択できる展示動線はリピーター利用者の獲得や展示解説の多様化に寄与している一方で、過去に博物館経験が浅い利用者には見落としへの不安を感じさせることが多いという問題があることがわかった。また、その要因として、事前説明が不十分であることや、利用者の博物館展示に対する先入観が影響していることが考えられる。

今後の課題として、利用者の利用状況と感想を調査することで、選択できる展示動線がうまく機能しない要因を特定しなければならない。また、都道府県立歴史博物館が考える利用者との関係や、利用者の主体的な学びを促す展示方法について、利用者がどのように認識しているかも考察する必要があると考える。